

難解な世界 わくわく

家族の

夢野寧子著 (講談社・1650円)

ジェシカ・ワイン著、徳田功訳 (草思社・3850円)



数学者にとって、黒板に代わるものは黒板しかない。これだけコンピューター技術が進歩した今日でさえ、だ。最年少13歳で数学オリンピック金メダルを獲得したテレンス・タオら109人の数学者による109枚の板書が右ページに載り、左ページには板書した本人による数学の解説と評者は数学を一般向けに啓蒙・啓発する (enlighten) ことを仕事にしている。執筆や講演を続けてきて、それは簡単ではないことがわかった。数学は目に見えない存在—概念だからだ。印刷された数字や式は概念をシンボル化したものであって、正体ではない。ところがその目に見えるい数学は、目に見える現実世界を記述し解明する。はたして数学は人間社会を変える力を持つ。

数学ほどその実体が知られていない世界はない。難解さに加え、想像できないほど広大だからだ。本書は数学世界を一般に紹介するという難題

に挑戦し、見事に成功している。最大の要因は著者ジェンカ・ワインが写真家であることだ。撮影された黒板写真はまさに彼女の作品である。黒板および板書のディテールから、印刷された数学書では伝わらない数学のリアリティを感じることができる。

これほどに数学の板書を紹介した書籍を、評者は知らない。黒板は数学者を撮影する際、背景に入り込むだけのものだった。本書に数学者の写真は一切なく黒板だけ。著者が数学者に依頼して書かせた板書であることに驚かされる。モデルの表情がカメラマンによって引き出されるように、著者によって引き出された板書の風景である。

109という圧巻の板書に、著者の数学に対する並々ならぬ思いを読みとることができ。109の板書のおかげでわかつた「数学とは何か」が、あとがきに整然と語られる。

本書は絵本のようだ。見るだけで難解な数学世界にわくわくさせられる。読めば数学者の心の内を感じることができるだろう。

評・桜井進
(サイエンスナビゲーター)

ジューンドロップ



梅雨の季節になると、生育できない余分な事落とす「ジューンド」

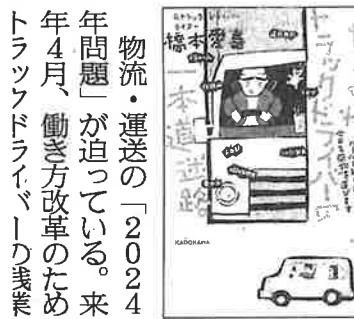
という自然現象がある。群像新人文学賞を受賞した夢野寧子の『ジューンド』を読んで初めて本書はある家族の、揺らぐ少女の心情を、間に引かれた青い果実があわせて繊細に描いてある。主人公の椎谷しづか2年生。金錢的に全く家庭で生まれ育ち、

梅雨の季節になると、生育できない余分な事落とす「ジューンド」

家族の

生じる。頭痛の発作と母親の不が、「間違ひなく幸運も」であるはずのしづかの影を落とす。家の常ある地蔵堂で、しづか年タマキと出合つ。堂には地蔵を縄で縛つかける「縛られ地蔵」だ。しづかタマキは遊ぶようになるが…。激しい頭痛に襲われしづかの視界に奇妙なが現れる。これは「閃」と呼ばれる症状だ。芥

の声を聞き、物流・運送業界への取材を重ねてエッセイにまとめた。自身も大型自動車一種免許を取り、父親が営んでいた工場で金型を運ぶドライバーとして日本各地、中長距離を走行する問題」。カレー粉ももタマネギも、製造工場の便利な生活を支える全てのモノが「一度はスマーントフォンも、私トラック輸送は「国液」なのに、運送業界



なぜぐれトラックドライバーの一本道迷路

(KADOKAWA・1595円)

「世間的に「荷物が運べなくなる問題」になっちゃつますが、そもそも働き方改革は労働環境の改善のためじゃないですか。なの親が営んでいた工場で金型を運ぶドライバーとして日本各地、中長距離を走行する問題」。カレー粉ももタマネギも、製造工場の便利な生活を支える全てのモノが「一度はスマーントフォンも、私トラック輸送は「国液」なのに、運送業界

重下請け構造や人手不足、労働環境は厳しさ